

朝霞キャンパス記念講演会
昭和62年5月20日（水）
朝霞校舎339番教室

「良識と法律」

元最高裁判所長官

藤林 益三

藤林でございます。たくさんのお客様がお集まりくださいます。周囲にはお立ちになる方がありますので、少しこちらでも話しくいような感じがいたします。

私、今日は何の原稿も用意せず、ただ、どういう題をつけたらいいかというお話でしたので、とりあえず「良識と法律」という題を決めていただきましたが、何もそれに限りませんで、普段から私が考えていることを時間の許す限りおしゃべりさせてもらうつもりでございます。

この間、九日（昭和六十二年五月）の土曜日の夜九時から一時間半、NHKの教育テレビでテレビシンポジウムがございまして、私はそれに出ました。あるいはこのなかで、それをご覧になった方がおありかと存じます。

これは五月一日にビデオに撮ったものを、九日に放送したのですが、私もどんなことをしゃべったか、いまいち覚えておりませんので見てみました。その時にも、良識という言葉は用いませんでしたが、あの題は「求められる法曹像」という題でした。法学部の皆さまには非常に関係の深い司法試験、あるいは司法修習生の司法研修の制度や判事補の研修の制度などについてのシンポジウムでありました。

私はその時に考えておりましたことの基本は、法律を勉強する前に、良識というか、常識を持たなければならぬということにあります。もちろん、法律家である前に人間でなければならぬことは当然であります。人間らしからぬ人は、当然法律を学ぶ資格はないわけでありまして。それから、法律家であります以上は、常識というか良識がなければならないのです。

だいたい法律とは、今日は成文法、不文法とございまして、その他に慣習法とか判例法とか法律の種類はたくさんありますが、成文法だけでもた

いへんなものでございます。

私が昭和三年に大学に入りました時は、いまの新書版より少し小型の、二センチぐらいの厚さの六法全書を持って学校へ行きました。ところがいまはその六法全書、皆さまはどういうものをご覧になっていらっしゃるかわかりませんが、おそらく中型の厚さ五、六センチのものを持っておられるのではないかと思います。

弁護士、あるいは裁判官が机の上においている六法全書はもっと大きいもので、昼寝の枕になるぐらいの高さがございます。しかし、それでもつて成文法がつきているわけではないことは、皆さますでにご承知のとおりでございます。

日本にある法令、憲法をはじめとして、国会で定められた法律、それからその法律に基づいて出されました命令、例えば政令、省令などがあると思いますが、そういうものと、また法律に非常に関係の深い告示というものもございまして。こういうものを集めたものが、現在、法令全書とか、法令収攬などという名前で出ておりますが、これは加除式になっている。それはほとんど変更いたしますから、それを差し替えなければなりません。

これでも相当の分量でございまして。百冊ぐらいあると思いますが、私の事務所にもございまして、もちろん大学にはございまして。

しかし、これは日本の現在の法律の成文法に基づくものだけでありまして、そのほかにもいろいろあるわけです。

法令と申しますと条例まで入ります。たとえばこの朝霞市にも市の条例があるはずで、日本全国に、都道府県それぞれ条例を持っておりますし、各市町村も条例を持っております。これはだいたい類似したものが共通し

ていると思いますが、これを集めれば日本の法令なるものは、書いたものだけでトラックに何杯になるか見当が付きません。それをわれわれが全部読むことができないのは当然であります。

要するにわれわれは、このぶ厚い六法全書を一切覚えてやろうなどという不届きなことを考えてはならないのであります。そういうことはできません、やるばかりもないわけです。

法律を勉強するのはそういうことではございませんで、リーガルマインドを養成するのが法律の勉強であります。それは法律的な良識を持つということであります。

いま非常に法律の数が多くなりまして、たいへんですが、昔はそれほどではなかったのは、この五十年の差をもつてもわかります。ましてやもつと昔は、法三章をもつて足るという言葉がありますが、書いた法律はそんなにたくさんなかったのです。それでも人類社会、人間の社会は十分やってこれたのです。

少し昔のことを考えてみますと、日本にもずっと古くから法律はあります。日本だけではなしに、人間の住むところには必ず法律というか、掟というか、定めがなければ社会生活は維持できないわけですから、どの社会にも定めはあるわけで、これが法律であります。

私は歴史をそんなに知りませんが、昔読んだ岩波文庫にたしかありました、祝詞（のりと）などを集めた本を読んだことがあります。これのなかにも、いつのころのものかわかりません、千年ぐらい前のものでしょうが、祝詞というと神さまの前で奏する言葉です。そのなかにも法律らしいものがあります。

たとえばその一例には、六月、十二月の大つごもりに大祓いをするのです。神さまの前でお祓いをする、清めるわけです。その時の祝詞のなかには、万民の罪、汚れを祓い清めるところがございます。このなかにも昔は農耕民族であったことがはっきりわかりますが、畔放（あはなち）という言葉があります。農村の水田の畔を放つ。あるいは溝埋め、水を通す溝を埋めるとか、そういうことを犯罪としていたようです。

もつとほかにたくさんあります。重播（しきまき）と申しまして、重ねて種を播く。人が大麦を播いたところに小麦を播くとか、そういういたずらをしてはならないということもありますし、農耕民族らしい定めがあることが、祝詞の文句を見てもわかります。

こうして、人間が住む以上は、それがどういう罰則を伴ったかはわかりませんが、これは制裁を受けたに違いありません。

世界の文明は、中国大陸、それからバビロン、アッシリアが興亡いたしましたメソポタミアの地方、それからエジプト、この三つのところに世界の一番古い文明は発達したのであります。それぞれのところに法律はありました。

私は、バビロン、アッシリアの興亡いたしましたメソポタミアは、行ってみたいと思ひながら、まだ行っておりません。しかし、あそこの歴史には私は非常に深い関心を持っております。

諸君にご参考までに申し上げておきますが、岩波新書のなかにキエラというアメリカの若くて亡くなった考古学者が書いた「粘土に書かれた歴史」という本がございます。これは非常に面白い本で、私は参考にしました。これは、昔メソポタミア、メソポタミアというとチグリス、ユーフラテス

の二つの川が流れている。チグリスは東、ユーフラテスは西のほうへ伸びている川で、いま戦争の場所になっているペルシャ湾に別々に注いでいたわけです。そして、その二つの末流がいつのまにか一つになってしまつて、いまはシャルアラブ川となっているようです。

この二つの間の土地がメソポタモス、ギリシャ語でポタモスは川で、メソは間です。ですから両河の間という地域であります。あそこには古い文明が起こりまして、キエラの本を見ますと、そこに古い法律があつたことが書いてあります。これは文書とは申しますが、紙や木に書いたものではなく、粘土板に書かれたものです。このことが非常に面白く書かれておりますから、もし興味がありましたら読んでみると面白いと思います。

紀元前二、三千年前に、あそこにシュメールという民族がおりました。シュメールの文明は非常に発達しまして、いろいろ建築などの文化が進歩しました。シュメールはペルシャ湾に近いほうにいましたが、北のほうにアッカドという民族がおりまして、アッカドがシュメールを吸収してしまいました。そして、アッカドの言葉や文字はシュメールが発明したのですがアッカド語といひます。

このアッカド語は、その後起りましたバビロニア帝国、サルゴンという人がつくつた国家ですが、同じメソポタミアに起つた国です。そのバビロン第一王朝の六代目の王さまがハムラビ、あるいはハンムラピと書いてある本もございすが、このへんはあのへんのことをよく勉強しなければ、どちらとも決め難い発音です。

このハムラビという名前、皆さんはお聞きになつたかどうか存じませんが、紀元前十七世紀ごろにいた人で、この人がハムラビ法典というものを

編さんしました。これはメソポタミアの地方の法律を、王さまが命令して編集させたものです。

これはペルシャの古い都のスーサというところで発掘された石の円柱に楔形文字（せつけいもんじ）で彫られた法律でした。こんなものを読める人がやはりいるんですね。楔形文字は普通は粘土に書いてあります。あのへんは乾燥した地帯ですから、土地が非常に乾いて泥が粉になっています。これを水でぬらしてこねて、レンガのようなものをつくります。あれほどぶ厚くはありませんが、それをステイルスといつて、草の先をとがらせたもので楔形に掘つていくのです。現物は非常にきれいなものであります。

この楔形文字をドイツ人のグローテフェントという人と英国人のローリンソンという二人の人が一八五〇年ごろに解読しました。紀元前二千年も三千年も前の文字を勉強して解くことができたのです。だからハムラビ法典も解読されて今日に伝わっているわけです。

これは紀元前一七〇〇年ごろのものです。この法典が発掘されたのは、一九〇一年か二年のことで、まだ百年たつていないのです。それが、先ほど申した二人の方が一八五〇年ごろに楔形文字を解読しておりましたから、ハムラビ法典はすぐに読めたのです。そしてそれが刑法とか私法、それから官吏に関する官吏法などについての二百何十条という条文でありました。だから昔から法律というものはあるのです。

くわしいことは私は存じませんが、これをいち早く日本でも勉強した人がおります。穂積陳重という人で、民法の起草者の一人であります。

明治の民法の起草者は、穂積陳重と富井政章と梅謙次郎の三人です。こういう方々がつくられたのが今日に残っているわけです。この穂積さんが、

一九二〇年ごろには日本にハムラビ法典を紹介されています。これは岩波文庫から出ている「法窓夜話」という、百の話を載せた非常に面白い本に書かれております。

ちよつと余談に入りましたが、昔から法律というものはあるということをお話したいのです。それから、それについての刑罰なども当然あったわけです。

エジプトにももちろん法律はありました。エジプトは紀元前三千年ごろからピラミッドの時代に入ります。だから、われわれのいまから言うところ、五千年前からああいふ大きな建築物をつくるような文明がありました。もちろん法律があつたはずで。

しかし、エジプトの文字は絵文字（ピエログリフ）でありまして、なかなか解けませんでした。みんな模様だと思つていたのが文字だったので。そのなかにもやはり法律はあります。

これは皆さんご承知かもしれませんが、一七九九年にナポレオンがエジプト遠征をいたしました。その時ナイル河の河口のデルタ地方にあるロゼッタというところで見つかったのがロゼッタストーン、ロゼッタ石といわれています。これには絵文字とギリシャ文字が書いてありまして、もう一つその土地の言葉の三つで、同じことが書いてありました。それを根拠にして絵文字を解くことができた。これはシャンポリオンというフランスのエジプト学者が一八二二年に解読しました。それからエジプトのお墓のなかの文字などがどんどん読めるようになったのです。そうすると、やはり文明というものが昔からあつたことがわかるわけです。

中国に行きましても、古いことはわかりませんが、昔から古い文明があつ

て、堯舜、あるいは禹という人が聖王と称せられまして、国民を治めておりました。そういうところには必ず法律があるわけです。しかしそういう法律は、今日のようなややこしい、べらぼうにでかい分量になるようなものではなかつたことは、当然であらうと思います。

旧約聖書を読みますと十戒というのが出てきます。旧約の二番目の書物に、出エジプト記、エジプトを脱出するの記があります。これにもシナイ半島でモーゼという人が、神さまから十の戒めを受けられるところが書いてあります。これはいつか映画になつて日本に來たこともあります。この十戒なども法律です。

しかし、昔の法律は社会の規則でもあり、お互いの間の道徳的なものでもありました。ですから法律に違反することは、人倫、道徳に背くことでもあつたわけです。これは先ほど申しました、日本の農耕民族としての定めにも共通する性格であります。だから一般に通用する規則であつたのです。

ところがこのごろの法律は、普通の常識では解釈できない法律が多くなつてきました。殺すべからずというのが十戒の一つにあります。十戒は神さまから授かつたというユダヤ人、イスラエル人の法律でありますから、私（ヤーベ）のほかには他の神を拜んではならないというのが第一条にあります。旧約にエホバの神と言われているのは、どうも間違ひらしくヤーベというのが本当の呼び方らしいのです。

ヘブライ語には子音しかなくて母音がありません。いまは母音を補つて読みますが、子音ばかりですからエホバとも読めますし、ヤーベとも読めます。母音の送り方によつて違うのです。

だから、いまではヤーベと言う。ヤーベのほかに神を拜んではならないというのが第一にありまして、そのほか、父や母を敬えとか、人を殺してはならないなどということが十条出ています。これなども道徳であり法律であつたわけです。

ところが今日では、法律は必ずしも道徳に関係のないものがあります。たとえば、戦時中に、統制違反というのがありました。物によっては値段が一定されておりまして、それ以上で売買すると統制違反になりました。

これも戦時中はどうしても大事な法律になりまして、それに反すると、法律に違反することが倫理道徳に反するように言われるようになったことでもあります。

しかし刑法だけが法律ではございません。お互いの市民間の法律は私法でございます。私法にも非常に技術的なものが、今日は増えてきたわけですよ。

皆さんもこれから勉強されると思いますが、民法はある程度良識をもつて解すれば解せられます。日本の風俗、習慣を知っていれば、債権法、親族法、相続法は解釈しやすいわけです。外国の人にはわかりにくくても日本人にはわかります。

ところが商法となりますと、なかなか難しいのです。これは簡単にはいかない。会社という法人をつくることができる。そうするとその会社についての定めをつくらなければなりません。会社とは法人格を持った人の組織、資本の組織であります。そうすると人間がつくった法律ですから、常識では解釈できません。ある程度やっていけば常識も働いてきますが、やはり勉強しなければわからない。

ましてや、小切手法とか手形法ということになりますと、これはまた完全な技術的な法律です。だから、道徳とはあまり関係がないわけです。もちろん手形や小切手を出しておいて、不渡りするということは道徳に反します。しかし、その法律技術的なものは、常識ではわからないのです。そういう法律がどんどん広がってきたわけです。これが今日われわれを悩ませております。

私はこの八月に満八十になりますが、そういう老人には自動車の運転はできません。目も悪い、勘も悪い、これはどうしようもない。ワードプロセッサもとても扱えません。私はビデオをいじることもあまり得意ではないのです。うちにありまして、せがれがとってくれたビデオテープを見るぐらいで、自分でとることはできない。ああいう技術的なものは非常に私たちには苦手です。

しかし今日の人はそうではないのです。そうでなければ困るんです。追々文明が進歩しまして、文明の利器がどんどん発達しますから、皆さんはそれで十分にやっていけるわけです。

しかし、このごろ問題になっているコンピューター犯罪というのがあります。刑法の改正につながっていくわけです。こうなってくると、私などはとても理解に困難であります。

私も最高裁判所におりまして、非常に困ったことがあります。これは電波の事件で、工業所有権に関係しておりました。これは調査官といつても最高裁判所の調査官では間に合わない。東京高等裁判所に特許専門の調査官がおりまして、これは技術屋です。これと呼んで来て教わりました。ところが一週間たつて、もういっぺん合議するともう忘れているのです。こ

の間教わったことがどうしても思い出せない。これには困りました。私だけではなくて、五人の仲間がみんなへこたれまして、何とか片づけはしたものの、どうも気持ちの良くないことでした。

理解のできないことを、何とか片をつけなければならぬ。こうなっていると裁判官は非常に困ります。こういうことになる、われわれはシャッポを脱がざるを得ない。しかし、そういうことを言っていたのでは裁判官は務まらないのです。

ここにおいでの方々は、法学部の方が多いだろうと思うし、今年お入りになったばかりで、まだ法律のホの字ぐらいを教わった程度の方々もありだろうと思います。あるいは法律を専門にやっていない方もおありだろうと思います。

しかし、法律を勉強したからといって、これだけのたくさんの方が、先ほど申しました、法律家、法の実務家になろうと思っている方ばかりでもなからうと思います。今日申し上げているのは、それを前提にしてお話であります。

法律家はある程度の常識があつて、リーガルマインドがあればやっていけるんだということをまず言うのが、私の目的であります。しかし、それだけでは済まないのだということも言い添えておかねばならないと思います。

私は裁判官を七年余りやりました。弁護士経験は約五十年です。辞めてからこの八月で十年になりますが、この十年間も弁護士ではあつたわけです。しかしもう実務はいたしません。もうやっても格好が悪いし、もう年寄りで、かばんぶら下げて法廷の廊下を飛び歩くわけにもいかないので、

もう何もいたしておりません。

私の事務所の門下から一人、また最高裁の裁判官が出まして、私はたいへん喜んでおります。私のせがれもいま弁護士になって、ちょうどこの春で十年たちました。これがあとを継いで、五、六人事務所におりまして、やっていくれます。

そういうことで、いま私はやっておりませんが、私は四十年近く弁護士をやつて、法廷の下から裁判席を見上げていたわけです。それから裁判所に入りましたから、一番、二審をつかさどる地方裁判所や、高等裁判所の裁判官の経験はぜんぜんありません。しかし、下から見ていて、だいたいの見当はつておりましたが、最高裁判所に入つて本当に自分で判決をしなければならぬという立場に身を置いてみると、また変わった考え方も出てくるわけです。

裁判官はいかにして判決をするか。これを皆さんに申し上げたいのです。それに、どうしても良識というものが必要であることを、またおしゃべりしようと思います。

裁判というものは、すでにご承知かもしれませんが、刑事にしても民事にしても、裁判はまず最初に事実の認定ということをしなければなりません。とにかく刑事事件が発生したのですから、その刑事事件はどのようにして起こったか、だれがそれに関与したかを認定しなければなりません。

あるいは民事の争いでは、ここに本当に金の貸借があつたのかどうか、あるいは詐欺が行われたのかどうかの事実の認定をしなければなりません。だれがそういうことをしたか。そこへもってきて法律を適用するわけです。

その法律は先ほど申しましたとおり、非常に大部なものです。それを何もそらんじて覚えている必要はないので、どこを押せばどんな音が出るか、そのキーポイント、キーを知っていれば法律家は勤まるわけです。いちいち条文を覚えていいる必要はないんです。覚えているとかえって悪い結果もあるんです。

税法などを見ますと、しょっちゅう税率が変わったり、金額が変わったりしております。だから、自分が頭に覚えていいるつもりでやると、かえって失敗することがある。その度々に条文にあたったほうが間違いがないのです。そういう法律もごさいます。

要するに、認定したその事実を法律をあてはめるわけです。探して来てあてはめると結果が出るわけです。そう言うと、それは単なる三段論法ではないか。論理学の最初に習う三段論法というのがあります。大前提、小前提、それから結論が出るということになりますが、判決とはそう簡単なものではありません。

事実の認定そのものが裁判官によって違うのです。裁判官によって事実の認定や、あるいは法律の解釈がそんなに違っては困るじゃないかと言う人が当然あると思います。

まず事実の認定がありまして、そしてそこに法律を適用するのに、法律の解釈をもってくる。そしてそれで結果を出すわけです。ところが、その事実の認定と法律の解釈が人によって違うことがあるのです。

だから同じような事件でも、裁判官によって結果が違ってくるわけです。だから控訴があり上告があるということになります。

ここで申し上げておかねばならないのは、上告は事実の認定について

ではあまり意味がないということです。事実は一審、二審で決まるわけです。上告は法令の解釈を統一するところですから、そこにちよつと考えを置いてもらわなければなりません。事実の認定と法令の解釈で判決は出てくる。

ところが人が違うとその結果が違ってくる。そうすると控訴したり上告したりして、不足を言うわけです。どうしてそれが違うかということを申し上げたいのです。人によって違っては困る。これは裁判を受ける当事者の方は当然そう思われるでしょう。しかし事実違っていることがあるのです。ぜんぜん反対の解釈をする人がある。

この事実の認定が動きます。法律の解釈も動きますから、両方が動けば結論は変わってくるのが当然であります。どうしてそういうことになるのか。裁判官である人間、あるいはその当事者である代理人、あるいは弁護人、これらがそれぞれ自分の解釈を持っている、自分の主張を持っているわけで、それが法廷において争われるわけです。

ことに裁判官は、その際に非常に大事な仕事をするわけです。人間である以上は、十年、三十年と裁判官の経験を積みましても、やはり人によって違うことがあります。

A という裁判官がおりまして、これは子供の時分からすんなりと学校へ行きまして、そう落第もせずにと勉強をして、法律学を修めて、大学を卒業して、わりあい早く司法試験を通じて司法修習生になったという経歴を持っているとします。そして法律ばかり勉強してきたと仮定します。

片一方は苦学力行して、親も無くて、あるいは片親しかなくて苦労しながら学校へ来て、学校も苦労しながら出た。社会のことはある程度知って

いるという人。

やはり育ちが違う、それだけではなくて、人間はいろいろ受けてきた教育、育ってきた環境、それから先輩や友人、自分が若い時分に勉強したと、小説を読んだり、詩を読んだり、歴史を読んだり、いろいろ勉強いたします。これが人間全部にしみ通って、人間の人格というものが形成されているのです。

私は京都の田舎、山の中の育ちです。三人の姉は小学校を出るとすぐ女中奉公に京都にやられました。そうでないと家がやっていけなかったのです。昔はお手伝いさんなどといういい名前と呼ばれなかった。下女とか女中とか言われまして、週にいつべん休みがあるなどということはない。半年にいつべん一日か二日、盆と正月だけが休みなのです。それで、朝早くから夜遅くまで酷使されまして、十分睡眠もできず、栄養もとれず、結局三人の姉はみな結核で死んでしまいました。私一人が母と残った。

ところが私は、三歳のときに父がなくなつたので母の里に引き取られて百姓の手伝いをさせられました。小学校三年ごろまでにはもう手伝つておりました。山へ柴刈り、あるいは薪を取りに行ったり、そういうことをいたしました。

その後母は町の醤油屋へ雑役婦として住み込みました。住み込み働きをいたしまして、私も一緒にそこで住みました。そして私は醤油の配達や掛け取りを、子供の時分、小学校三年ごろから六年までやっておりました。当時は子供の自転車がないので、大人の自転車の三角の横乗りをいたしまして、それで醤油を配達したり、あるいは掛け取りをしました。冬は雪のなかを長靴をはいて、ゴム長がまだできたての時分でしたが、掛け取りに

雪のなかを歩いた覚えがあります。あるいはタル拾いということをやったこともあります。

それでは、どうして大学へ行つたのかということになりますが、ちょうど私が小学校を出る時分に第一次世界大戦が終わりまして、そのころ私に、大阪で金もうけをした人が、学校へ行けというわけで金を出してくれたのです。

当時といまでは貨幣価値が違つておりますから、言つてもおわかりにならないと思いますが、それでも私に十分とは言えませんでした、大方の学費は出してもらい、とうとう大学まで出してもらったのです。

私は早く母を引き取りたいと思いました。母は苦勞ばかりしておりましたから、早くお金もうけをして引き取らなければならないという気持ちが私にはあつたわけです。だからそのつもりで勉強いたしました。これは私にとって非常に良かったと思います。

私は若い時分にいろいろなことをいたしました、これが弁護士になつても、裁判官になりました、その苦勞というか、昔の経験が非常に役に立ちました。いわゆる人情の機微を察するということは、そういう経験によつて私には与えられたのです。これを皆さんに言つておきたい。

だから、順調に、親に金があつて、すんなりと試験が通つて法律家になることが、必ずしも幸福ではないということを申し上げておきたい。

そのように人間が苦勞したり、苦勞しなかつたりして勉強をいたしまして、法律を身に付けます。そして、自分が若い時分に読んだ思想の本、あるいは小説の本などが自分の血となり肉となつておりますから、今日の判断ができるわけです。

私は、東京の大学で末弘巖太郎という、昔の民法の偉い先生に民法をずっと習いました。この方が法学部の学生を前にして、「このなかに判検事、弁護士になる連中はそう多くなろう。しかし法律的なセンスをみんなが十分勉強していくのが法学部の勉強法だ」とおっしゃったのを覚えています。

それからこういうことも言われた。「裁判官は裁判を勘でやるのだ」と言うのです。勘などでやられてはたまったものじゃないと、皆さんは思うかもしれませんが、勘というとおかしいですが、これを末弘先生は言いました。全人格的判断、これが勘だと言うのです。

私はかねて思っておりましたが、裁判官は論理だけ、理屈だけを押しつけて結論を出すのではないということを、皆さんに言っておきたいのです。

あなた方がもし裁判官や弁護士になられたら、それを経験なさると思いますが、結論というのは先に出るのです。

何年か弁護士をしておりますと、必ずその事件を見まして、これは勝つ事件か、有利な事件か、不利な事件かというのはすぐわかります。依頼人が相談に来ます。きみ、それはあきらめたまえ、こんなのは金をかけて、時間をかけてやっても何にもならん、よしなさい。ワシの言うことが気に入らなければ、ほかの弁護士のところに頼みに行けというわけです。そうしますと、だいたいそういう結果になるんです、話を聞いているともう結論が出てくるんです。これはいかん、こんなものは扱うべきものではない、これはよく説得してやめさせてやったほうがいいということが、弁護士をやっておりますらわかるのです。

私は一審、二審の判決は書いておりませんが、私の弁護士として下から

見ていた経験では、裁判官はだいたい結審すなわち弁論を終結する、いままで法廷で何べんもやり合ったものを、もうこれで終わりにして判決にするということを結審という。審理を終結する。

結審する時には、裁判官はだいたい心証は得ていると思います。これは原告の勝ちだとか、被告の勝ちだということが、だいたい裁判官には決まっているはずで。

それは、これまでずっと証人を調べたり、本人の言うことを聞いたり、代理人の書面を見たりしますと、自然と結論が決まってくるのです。その結論を裏付けるだけの論理を立てなければならぬ。

ですから、皆さんに申し上げておきたいのは、迷路、ラビリンスというパズルがあります。いまはないかもしれませんが、私たちが子供のころは雑誌などに出ていました。いろいろ曲がりくねった道、線が引いてあって、こちらへ出るかこちらに出るか。鉛筆でたどっていくと、行き止まりになって向こうへ出ない。そうするとこの道はだめだ、今度はこっちのほうから入って行くと抜けられるかもしれない。これが迷路というパズルの一種で、ラビリンス、こういう遊戯があります。

裁判とは、そのように筋を追って行って、こっちに出たらこっちの判決だというものではなくて、裁判官にはまず結論が出るんです。まず、全人格的判断で結論が出る。これが非常に大事なのです。

これが、その裁判官がこれまで勉強して、いろいろな経験を積んで、学問をして、小説も読み、詩も読み、そうして得た全人格的判断で裁判の結論が決まるわけです。そうすると、この裁判はここから入って、こっちに出なければならぬということが決まるんです。

論理を追っていますと、理屈だけを重ねていますと、こっちへ出るかも知れない。しかしそれではいけない。こっちへ出ようと思えば、その理屈を考えるのが裁判官の役目なのです。あるいはそのように持つていくように書面をつくるのが当事者代理人の弁護士を務めなのです。裁判官をそういう頭にするように書面をつくるのが弁護士の仕事なのです。

そういうことをまず考えないと、裁判はまず理屈で押して行って、押しでいったらこっちへ出てしまったので、こっちへ出た判決を書くというのではないということです。それには非常に人間が大事である。

私はよく言います。裁判官、あるいは弁護士、法律家は、いろいろのもの、知識を吸収し、人格を磨きまして、事件を濾過する。人間というフィルターを通すのです。そうすると結論が出てきます。これをまず知ってもらわなければならない。

理屈、論理で押して行って結論の出たところに判決を落とすというのはないのです。どうしても、これはこへ行くべきものだということになる、十分当事者を説得して、社会を納得せしめる論理を、そこで自分が考案しなければならないのです。

そこへ行くのに少しぐらい高い所があれば、シャベルで切り崩さなければならぬ。そこに竹の根っこがあれば、のこぎりで切つてでもここに道を通さなければならぬ。そういう論理、十分に世間を納得させ、学者が判決を読んでくれているような論理を、そこに形成しなければならぬのです。これが裁判官の一つ大きな仕事です。

そういう難しい事件ばかりあるわけではありません。しかし、理屈だけで押して行って判決はできるものではありません。

だから弁護士となって、当事者の代理人となって働く時には、これを十分心得て、裁判官を納得せしめるだけの理屈を考えなければならぬのです。裁判官があつちを向いているなと思えば、こつちを向かせるように、一生懸命その理屈を考えて、なるほどそうだと思うしめるだけの論理を考えなければならぬのです。

これにはどうしても勉強が必要です。それは、ただ六法全書を覚えるような勉強ではだめなのです。六法全書は付け足しです。六法全書はその解釈を学校で習えばいいのです。そのほかにもっともって人格を磨くべき学問があるはず。歴史を勉強し、思想、宗教、文学などを勉強して、それが血となり肉となって人格を形成し、そしてこれがフィルターとなって、判決が出たり、準備書面の文句が出てくるわけです。そういうのが法律家の仕事であります。

私が申し上げたいのは、この間テレビで申しましたが、結局法律家として望ましいのは品性である、人格であるということです。これはどなたも異議がありません、そのとおりだということになりました。

いやしい心根を持って法律家になつたら、とんでもない法律の解釈をすることにしますし、法律のとんでもない利用の仕方をするようになります。これは法律家にとって、非常に大事なことであります。

法律家は法律の解釈は少々おかしくても、人間だけはしっかりしなければならぬ。そして人間を磨いていけば、あまり間違いない法律の解釈ができるのではないかと思います。

要するに、これは良識の問題です。良識は学んでつけることのできるものではありません。世の中に、知識というもの、知恵というものがあ

す。この知識とは本を読んでただちにわかるもので、字引を引いてもわかるものです。

知恵と知識の区別。知恵は、生活の知恵とか、人生の知恵とか言います。知識は勉強すれば、あるいは字引を引けば出てくるだけのものです。百科辞典を覚えるという手もありましょう。テレビゲームに出て賞品をもらうためには、そういう勉強をする人もあるかもしれませんが、ああいう雑ばくな知識は、あまり役に立たないのです。知識は知恵にならないければなりません。

知識はドイツ語ではビッセン、知恵はワイズハイト、こういう言葉の違いがあります。どうしたって人間は知恵を得なければなりません。知恵は、ただ勉強するだけでは、法律を勉強するだけでは法律の知恵は出てきません。いろいろの学問をして、人に接し、人格を陶冶し磨くことによって知恵は出てくるのです。

その人間の知恵というものは、昔からあまり進歩しないのです。知識はどんどん広がってきました。だから六法全書が厚くなるのです。しかし人間の知恵はそれほど発達しません。

紀元前四百年前のソクラテスやプラトンの時代から、あまり知恵は発達したように見受けられません。われわれが本を読んでおりましても、いま立派に書いてある本を読みましても、それは昔の人が言ったことと、あまり変わりがないのです。

この人生の知恵とは、得るのに非常に難しいのです。これはあらゆる勉強をしなければ、到底身に付きません。年がいても身に付きません。私も齢、すでに八十になろうとしておりますが、まだまだ決して知恵を得た

とは思えないのです。これは情けないことですが、人生は一生勉強の世の中で、人生は一生勉強して済まさなければならぬのです。

司法試験をパスしたから、それでいいというわけのものではない。大学の法学部を出たから、それで法律を知っているというものではない。法律はどんどん変わっていきます。一生勉強です。そして、人格を陶冶していかなければならない。そうすればいい判断ができと思っています。これはどうしても皆さんに心得ておいてほしい。

商法の勉強、手形法の勉強をするのは結構ですよ。これはどうしても、法学部を出て会社へ入る人でも、これだけは心得ておかないと、ものの役に立たないのであります。こういう基本的な勉強は十分してもらわなければなりません。

しかし、それと同時にほかの勉強もしてもらいたいです。そうでないと、欠陥人間ができます。法律だけしか知らない人間が出てくるのです。

この間のシンポジウムでも私は話しました。試験ばかり受けて、年を過ぎた人は使いものにならないではないかというのが私の意見です。司法試験ばかり十年も十五年も受けている人がいるようです。

この間法務省から、この四月二十七日を第一回として、法曹基本問題懇談会というのが開かれております。私はその資料を、テレビに出るのでもらいまして読んでみました。そうすると、長い間かかって試験を受けている人がいるのです。通るまで受けるのだという人がいる。そうやってくると、まことに人生をさびしく暮らすことになるのではないかと私は心配するのです。

法律家に向いている人と、向いていない人とあるのです。これは、どう

してもそういうことを言っておかなければならないと思います。とことんまで試験を受けていくのは、その人のために惜しいことです。ほかにつづしが効く間に転換するほうがいい。十年も十五年も受けて、四十になったら、もう会社で就職することは不可能でしょう。家へ帰って百姓でもするのなら別ですが、そうでなければ人生に無駄をつくることになる。これは社会的なロス、損失です。こういうことになっては困ります。

だから、法律ばかり勉強して、試験、試験と行くのは、あまり感心したことではないと思います。これをよく心得ておいてもらいたいと思います。やはり試験を通るなら三十前、二十五、六で通ってもらいたい。そうでないと、後の働く時間が減るのです。だから、それでいけなければやめて、方向転換することです。

昔、私のところに事務員がおりまして、よくできる男でしたが、ずっと勉強していました。夜間の中央大学に行って一生懸命に勉強していて、わりあいによくできる。今度は通るかと思うと通らない。私も期待していたのですが、ところが追々年がいく。もう三十超えたら、私も世話をしてやるところがなくなります。だから、おまえ、今年の正月からオレの事務所に出て来なくてもいい、月給はやるから最後の突撃をしろと言いました。そして突撃が功を奏しなかったらやめろ、オレがほかに世話をしてやるから。弁護士事務所の事務員をやめて会社へ行けと言って、片をつけました。そして、やはり通らなかつた。それがいままで受けていたら、私はたまつたものじゃない。私はそれに一生ロスさせることはできなかった。だから説得したのです。もう五へんも受けたのだからやめろ、決して悪いことは言わないから、オレの言うとおりにしろということで、私はそれを方向転

換させたのです。

これは大事なことであります。そういうこと、人生の勉強と、試験のことと、いろいろなこと。

私は原稿を持つて来ないので、頭に浮かぶままを皆さんが聞いてくれればしゃべる。眠たそうな顔をすれば、方向転換して、もう少し皆さんの興味をひくお話をしようと思って、ただ皆さんの顔を見ながらしゃべっているわけです。

約束の時間まで大方きてしまいましたので、このへんでやめておきますが、私の言いたいことは、法律を勉強するのには、法律の勉強も大事だが、同時にほかの学問を勉強してもらいたい。そして、法律家になったら良識を持ってもらいたい。その良識を磨く方法はいろいろある。これは皆さんがみずから考えてもらいたいのです。

始まるのが遅かったので、もう四時近くなりました。もう少ししゃべりたかったので、このへんでやめておきます。

どうも皆さん、ご清聴ありがとうございました。

講師紹介

藤林益三
かじ ぼやし ます ぞう

明治四〇年 京都府生

昭和六年 東京帝国大学法学部卒業

昭和七年 弁護士開業

昭和三二年 司法研修所教官

昭和四五年 最高裁判所裁判官

昭和五一年 同長官

昭和五二年 退官 現在、日本法律家協会会長

勲一等 旭日大綬章（昭和五二年）

著書

「銀行員の法律あ・ら・か・る・と」

「一法律家の生活と信仰」

「法律家の知恵」他